

“My Kinsman, Major Molineux” における

生命のサイクル

岡 本 克 己

“My Kinsman, Major Molineux” A Pattern of Life Cycle

Katsumi OKAMOTO

Received September 30, 1982

すぐれた芸術作品は様々の角度からの批評、鑑賞を可能にするものである。ことに、その対象となる作品が寓意の、或いは、象徴主義的な作品である場合、そして表現、状況上の ambiguity や “fancy and reality” (後出)——夢と現実——のオーバーラップする重層的な構造などをもち、作品解釈上のいわゆる “multiple choice” の自由がある場合などには、ますます多元的な解釈が可能となる。Hawthorne は Melville とともに、これを可能にする作家であり、この小論でとりあげる彼の短篇、“My Kinsman, Major Molineux” は narrative structure の単純さにもかかわらず、様々な解釈を可能にする初期短篇の傑作である。以下、まず簡単に、いくつかの可能な解釈に言及しておきたい。

作者は作品冒頭、前書きのパラグラフで、植民地時代後半の政治的激動の中で、イギリス国王に任命された colonial governors の権力の行使に、民衆が敏感に反応し、植民地の実質的な自治、総督の選任権を認めた勅許状の撤回以後、約40年間に任命された6人の royal governors のうち、4人までもが、民衆の反乱によって、或いは獄につながれ、或いは追放の憂き目にあい、また或いは議会対策に腐心し寿命をちぢめたという歴史的事実を記し¹⁾、なお付け加えて、民衆の攻撃は王室派の下僚たちには向けられなかったと述べている。以上の記述に基づいて、時代考証を試みると、次のようになる。1662年、Charles I が Massachusetts Bay Company に与えた勅令状 (Royal Charter 及び Cambridge Agreement) が James II によって撤回されたのは1686年であり、この作品の時代背景は17世紀末から18世紀前半ということになる。この作品は Boston を中心に革命へと胎動する植民地時代後半の社会情勢の中で、王室派 (Tory) と一般民衆の間におきた一つの権力抗争事件を題材にし、はからずもその渦中にとびこんだ一人の少年を視点的人物として描いた歴史物、或いは政治的フィクションである。

ホーソンの *American Notebooks* は他作家のものと比較しても実に興味深い創作ノートであるが、その特徴はそこに記載されている彼の着想が著しく寓意的であることである。アレゴリックな人生観は Puritanism の特色であり、ホーソンが Calvinism の原罪意識を作品の基調にしているからといって、彼を Puritanism の熱烈な信奉者と考えるのが当をえないのと同様に、Puritan-

ism の偏狭さに批判的であるからといって、彼に対するその影響を否定することはできない。Bunyan の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*) がホーソンの愛読書であったことは衆知の事実であるが、“My Kinsman, Major Molineux”を寓意の文学とみなせば、この作品は一つの目標(Success) に向かって苦闘する若者(Everyman) の物語となる。なお、この allegory に歴史上の人物を仮りにあてはめると、民衆の蜂起の指導者に、植民地議会(the House of Representatives) の尖鋭な指導者、例えば Patrick Henry を、Major Molineux と「咳ばらい」の老人には英国植民地の軍事、政治上の代表者を、Everyman に人生の知恵を与える「紳士」に、18世紀啓蒙主義を代表する Benjamin Franklin を、ということになる。

この作品はまた、田園と都会、素朴と複雑、純心と罪といった対立する二つの世界をあつまっている。その他、作品中の表現上、状況上の暗示を考えあわせると、後に Henry James が発展させる「国際関係」のテーマ、innocent American と sophisticated Europe との関係を描いたものとみることができる。この作品に Mark Twain の *Innocents Abroad* や Henry James の *The American*, *Daisy Miller* などのテーマを読みとり、Robin に Daisy Miller の像を重ねることが可能であろう。

長篇、*The Scarlet Letter* や短篇の“Roger Malvin's Burial”や本篇などにみられる introduction や preface の類は、ホーソンに特徴的な技巧である。それは非日常的な一編の夢物語ともとれる作品に、歴史的粧いを与えることによって、作品に reality をもたせ、読者の注意を惹きつけるための技巧である。芸術作品は時間・空間の制約を越えた普遍性をもつものであり、プロットやテーマの異常性を和らげるために、芸術家がたとえ過去に題材を求めても、彼は本質的にはすべて人間の現実の問題を扱っているのである。ホーソンはロマンスを「人間の心の真実」を描くものと言うが、彼は“My Kinsman, Major Molineux”に、希望と絶望の間を揺れ動く人間の心の真実を、少年から成年に達しようとする主人公 Robin の半夜の行動に描いたのである。この作品はいわゆる *Bildungs Roman* であり、後の *The Adventures of Huckleberry Finn* などと同様に、イニシエーションのテーマ、父と息子の問題などを扱っており、ユング的解釈が可能である。

“My Kinsman, Major Molineux”はまた、怪奇的、幻想的な作品であり、Gothic romance の要素を多分にもつ短篇である。深夜の街、月光、無気味な笑い声、顔面が赤と黒に染め分けられた異相の男などといった悪鬼のような登場人物、眼前で姿を変え、伸び縮みする建物の柱、突如としておこる光の狂宴、喧噪などがそれである。また、全篇の出来事は“*Young Goodman Brown*”の場合と同様に、Robin が深夜の街角で見た悪夢を描いたものとみることができる。“……Well, Robin, are you dreaming?” inquired the gentleman, laying his hand on the youth's shoulder.” (p. 63)²⁾ 主要な登場人物(主人公、紳士、異相の男)をそれぞれ自我、超自我、イドの関係にあてはめ、フロイト的解釈をくだすことが可能である。

以上、短篇“My Kinsman, Major Molineux”が見せるいくつかの面を指摘した。文学作品は一個の有機的統合体であり、この作品の上記各面を密接に関連させ、そして一つの有機的総体としてこの作品を成り立たせる統合の中心は何であろうか。本稿では、それを生命の循環(life cycle)と考える。しかし、それはただ単なる死と誕生の繰り返しや人生の一つの段階から次の段階へのサイクルを意味するのではなく、この作品が主人公(Everyman)の initiation の体験を物語りながら、そのなかに、人生の一部を描いて人生そのものを、また平面上よりおもむろに螺旋をえが

き上昇する生命のサイクルを暗示させるものがあることを、特に指摘しておきたい。

「人間の心の真実」を追求するホーソンの作品は、短篇、長篇を問わず、罪や悪を作品のテーマや基調にし、様々な罪のタイプや性質、その効果を、正確な心理描写によって、感動的に描きだしている。ホーソンの芸術性について詳しく論ずるスペースはないが、状況と表現上のアンヴィグニティとならんで、象徴的な色彩の使用、色彩感に富む文章表現は、ホーソンの特徴の一つである。なかでも、赤と黒はホーソン世界の悲劇性を効果的に高めている。1832年 *The Token* 誌に発表され、その後 *The Snow Image and Other Twice-Told Tales* (1852) に収められた“*My Kinsman, Major Molineux*”は三年後の1835年に発表された“*Young Goodman Brown*”や1851年の“*Ethan Brand*”とともに、夜の探求を扱った代表的短篇であり、これら三篇は登場人物の性格や物語の時間帯、その他種々の設定に共通するところが多い。“*Young Goodman Brown*”は善良な主人公が、日没時に彼の妻（アレゴリックには愛と信仰）³⁾を捨て、夜陰の森の中へ旅立っていくところから始まる。冒頭のパラグラフは、前記の特徴を含めて、ホーソンのすぐれた芸術性を表わす、含蓄に富む文節である。

Young Goodman Brown came forth at sunset into the street at Salem village; but put his head back, after crossing the threshold, to exchange a parting kiss with his young wife. And Faith, as the wife was aptly named, thrust her own pretty head into the street, letting the wind play with the pink ribbons of her cap while she called to Goodman Brown. (p. 74)

一方、，“brown, curly hair”をもつ、“*My Kinsman, Major Molineux*”の主人公 Robin は、素朴な田園の愛と信仰の生活を捨て、“success”を夢みて、迷路のような夜の街をさまようのであるが、主人公の人生開眼のドラマは、夜の世界を照らす月が昇って間もなく、彼が二つの世界をへだてる川を越え、九時近くから深夜に向う、闇の時間帯におこなわれる。船頭のカンテラと月光に照らされる、主人公の外観描写は次のようである。

He was a youth of barely eighteen years, evidently country-bred, and now as it should seem, upon his first visit to town. He was clad in a coarse gray coat, well worn, but in excellent repair; ... Under his left arm was a heavy cudgel formed of an oak sapling, and retaining a part of the hardened root; ... Brown, curly hair, well-shaped features, and bright, cheerful eyes were nature's gifts, ... (pp. 41~42)

ホーソンはこの短篇で、主人公が捨てた故郷と世俗的現実世界とを対照させている。この対照には、光と闇、愛と憎悪、暖と冷、信仰と懷疑、寛容と敵意、静と動、安定と危険など、彼の対立概念の多くが含まれている。Brown が Faith と別離して旅立つ暗い異端の森が、その対立する世界に、キリスト教教化の光に浴する、愛と信仰の microcosmos を想起させるように、Robin が別れてきた故郷の世界は、光のイメージをもっている。悲劇の本質の一つは一回性ということであるが、Robin がやさしい金色の光に照らされる世界から、夜の世界の、闇の力に身をゆだねたことは、作品の悲劇性をその冒頭において余すところなく伝えている。白昼の光は「正気」の世界の光であり、夜明けは「正常な」人間にとってほっとする自然現象である。真実に覚醒していない町（“a sleeping town”）で、人人は酒や紫煙、笑い声やパーティに逃避し、夜回りや船頭は、自然の光に代わる人工の太陽、カンテラを携え、市民は家々に灯りを灯し、酒場や店のウィンドーはあかあかとランプをつけ、昼の世界を現出する。しかし Robin は彼の“shrewdness”

と“oak cudgel”を唯一の武器に、そして夜の世界を照らす天の光の下で、孤独の彷徨をつづけるのである。

Robinにとって“森”や“丘陵”にかこまれ、清流の流れる、故郷の自然は、過去の世界である。台上に立つHesterのように、Robinが時間・空間の桎梏を断ち、冷たく暗い現実から逃れる夢の一瞬に、彼の心に描きだされる故郷の風景は、家族や隣人たちに囲まれ、聖書を手にして、金色の夕日に照らされて立つ父の姿——“the goodman in the midst, holding the Scriptures in the golden light that fell from the western clouds” (pp. 55-56) に集約される。しかしそれは、Hesterの場合と同様に、苛酷な現実からの逃避の結果であり、Robinはその心象があらわす意味——故郷が愛と信仰の聖い世界であるという夢の真実——を認識するまでにはいたらない。ホーソンは1850年の短篇“The Great Stone Face”に、美しい自然の中で natural piety をもって成長し、人間や世界に対する愛と畏敬を深め、遂に外と内と調和を達成した主人公 Ernest の人生を描き、自己完成の一つの方向を示唆しているが、その中で Ernest と the Great Stone Face (救世主の象徴)との一体化は、次のように述べられている。

... It was not mere breath that this preacher uttered; they were the words of life, ... At a distance, but distinctly to be seen, high up in the golden light of the setting sun, appeared the Great Stone Face, with hoary mists around it, like the white hairs around the brow of Ernest.⁴⁾

^{いりあい} 入相の金色の光に照らされる信仰の人は浄められた大地の中心的イメージである。ホーソンは、くどいと思われるほど、Robinに“shrewd”という epithet を多用するが、夢の真実は想像力の活動する‘heart’の直観的、総合的な認識によって把握されるものであり、冷たい分析的な知によって把握されるものではない。しかし権威主義的な社会が設定した人生の目標——名声や富、或いは権力——を求める Robin, “a shrewd youth”は、すべてを“shrewdly, rationally, and satisfactorily”に解決してしまうために、彼の心を混乱させる笑い声や威嚇に接しても、また夢の表象を見ても、そのかくされた意味を正しく読みとることができないのである。「善良」で未経験な Robin にとって、現実世界は複雑怪奇であり、危険にみちみちている。彼の「棍棒」はもとより、彼の「利口さ」も、あからさまな「敵意」や「軽蔑」、また「嘲笑」、さらには正義の衣に装われた残酷さ⁵⁾や、“Gospel truth”を装う色欲の誘惑、或いは親切心を装う無関心さに対抗するには無力である。*The Scarlet Letter*で“town-beadle”が“the whole dismal severity of the Puritanic code of law”の形象化とすれば、“My Kinsman, Major Molineux”の夜回りは“a heavy yawn”, “sleepily”, “asleep”, “drowsy”に示されるように、真実に目覚めていない権威主義的世界の秩序の番人である。そして色欲の誘いから一旦 Robin を守った、夜回りの偽りの親切心を見抜くのは、主人公の「本能的な反感」である。またその後、Robinが“scarlet petticoat”をはいた「黒髪」の女の、甘美な誘惑を危く脱するの、彼の「利口さ」によってというよりも、彼の純心さ、「善良さ」によってである⁶⁾。

一切の陰影をとどめず、台上に立つ Dimmesdale に頭上から照りつける白昼の太陽の光が、主知的現実、精神的・理性的秩序の光であるとすれば、夜の世界を照らす月光は、旅人を夢の世界へ誘い、心の迷路——「次々とあらわれるまがりくねった狭い街並み」——に迷う Robin を、直観的、総合的な認識に導く、想像力の光である⁷⁾。“... the moon, creating, like the imaginative power, a beautiful strangeness in familiar objects, gave something of romance to a scene that

might not have possessed it in the light of day.” (pp. 53-54) 想像力は日常的、経験的なものに、永遠なるものを見、悟性が世界を本質的に無意味な、死んだ世界とみなすのに対し、世界に統一と生命を、そして意味を与える。疲労と困惑の長い彷徨の後、教会の入口の石段に腰をおろし、休息する Robin は彼の “usual shrewdness” が後退する一瞬、月光に照らされる街の、美しくまた奇異な風景に魅了される⁸⁾。Fromm は昼間の覚醒が現実との接触において部分的、一面的であり、また不安や欲望などによって、人は真に存在するものを見ないとして、「普通、人の意識は主として虚構や幻想からなりたつ虚偽の意識である。⁹⁾」と言うが、Robin のゆめうつつの心的状態は、彼の魂が解放される可能性を秘めた瞬間である。この可能性は「現実世界の眠気を催させる力を彼が振りきり」、彼が教会内部、永遠性の世界に目を向ける時、一層強化される。

… to shake off its drowsy influence, Robin arose, and climbed a window-frame, that he might view the interior of the church. There the moonbeams came trembling in, and fell down upon the deserted pews, and extended along the quiet aisles. A fainter yet more awful radiance was hovering around the pulpit, and one solitary ray had dared to rest upon the open page of the great Bible. (p. 55)

月光に照らされる聖書、Robin の心眼がとらえたこの永遠性の世界の一瞥は反射的に時間に捕えられた人間存在の悲劇的状况を Robin に直観させ、「故郷の奥深い森の中でも感じたことのない、激しい寂寥感に、彼の心を震わせる」。そして死の問題を彼の意識にのぼらせ、Major Molineux の死を予感させる。しかし聖書による救済の可能性は、Robin の未熟さのため、全うされず、彼はそれに「背を向け」、温かい生命の世界を切望する。——“Oh that any breathing thing were here with me!” Robin の激しい孤独感彼の心を故郷に飛翔させ、すでにみたように、夢の表象を浮かびあがらせるが、また同時にそれが彼にとって二度と戻れぬ世界であるという夢の真実を伝える¹⁰⁾。理知が後退し、ゆめうつつの心的状態は、また異様な光景を映し出す。彼は眼前の大邸宅を目を凝らして見ようとする。

But still his mind kept vibrating between fancy and reality by turns, the pillars of the balcony lengthened into the tall, bare stems of pines, dwindled down to human figures, settled again into their shape and size, and then commenced a new succession of changes. For a single moment, when he deemed himself awake, he could have sworn that a visage —— one which he seemed to remember, yet could not absolutely name as his kinsman's —— was looking towards him from the Gothic window. (p. 56)

バルコニーをもつ、この壮大な建物は、神の家に対し、地上の権力を象徴する建物であり、夢の真実は堂々とした外観を誇る、この建造物の崩壊せんとする姿をとらえているのである。これより前に、Robin はこの建物をもっと知的にとらえている。——“… he took a minute survey of an edifice which stood on the opposite side of the street, directly in front of the church-door, where he was stationed. It was a large, square mansion, distinguished from its neighbors by a balcony, which rested on tall pillars, and by an elaborate Gothic window, communicating therewith.” (p. 54) しかし、眼前に映し出される夢の光景は、今、後が外界の事象に対して、以前と違って新しい意味を感じつつあることを示している。それは、論理的、概念的な知によって与えられた形や秩序、知覚によって与えられたイメージが、想像力の働きによってデフォルメされつつあることを意味する。Robin の夢の風景にあらわれる顔——「ぼんやりとした記憶の中の叔

父さん (“Kinsman”)¹¹⁾の顔のようでもあり、はっきりそうとも言いきれない顔——は、想像力（心眼）がとらえた、揺れ動く構造の主である。この人物は Robin が街に入って初めて出会う、「杖をつき」重々しい “sepulchral hems” をする老人として、まず登場する。Robin にとって夜の街でのこの出会いは、現実世界との接触において最初の意外性の体験となる。しかし彼は、いつもの “shrewdness” では解けぬ老人の言行に、途方にくれながらも、なんとか合理的な解釈をくだし、この不可解な問題を処理してしまうのである¹²⁾。彼はこの短篇で四度登場するが、夢の情景で Robin が彼の “Kinsman” の死をありありと想い浮かべたように、この “sepulchral hems” の老人も、“cold grave” や “tombstone” など、Robin に死を連想させる存在である。死は彼にとって親しいものではなく、二度目の遭遇の際には、Robin は道を変えて避けてしまう。三度目の遭遇は前記引用文においてであるが、それは老人をこの建物と初めて結びつけ、彼の正体を明かし、また Robin にとって世俗社会での成功の象徴である Major Molineux と老人のイメージをダブらせ、彼らがまさに倒れんとしている体制の、それぞれ軍事的、政治的リーダーであるという真実を Robin に暗示しているのである。

すでにみたように、この作品は幻想的な夢の雰囲気をもっており、Robin の夜の体験を、Goodman Brown の場合のように、夢の体験と解釈することが可能である。「人間の心 (heart) の真実」を描くホーソンは、「心の洞窟」内部を描き出す夢とその真実に、非常な関心を示し、作品に描いた作家であり¹³⁾、彼の「夢の心理学」は現代科学の目をもってしても、正確である。人間の夢をホーソンは実体のない、愚かしい白昼夢という一般的意味で用いることがある¹⁴⁾。また Robin や Brown ら、未成熟な若者を恐怖させ、「悪こそ人間の本性」 (“Young Goodman Brown”) と欺き、彼らを懐疑と絶望の闇に突き落す悪夢としても描かれている。しかしホーソンにとって、悪夢は非合理であっても、実体のないまやかしではない。彼にとって、「人間の心の洞窟」の “gloom and terror” とその内容は、“light” や “beauty” と同様に、否定できないのである。ホーソンにおいて夢は心理学的な表現をすれば、自我の一面性を「補償」、「補充」するコンプレックスの表出であり、狂気の知の表われである。Dimmesdale がきびしい掟をもつ Puritan の閉鎖社会の中で、時折罪悪感におののきながらも、ひそかな喜びをもって眺め、安らぎを得る世界は夢の世界であり、それは狂気の知を通して可能なのである。¹⁵⁾ 夢の真実についてホーソンは “The Birthmark” で、次のように述べている。

Truth often finds its way to the mind close muffled in robes of sleep, and then speaks with uncompromising directness of matters in regard to which we practise an unconscious self-deception during our waking moments. (*Works*, II, p. 52.)

眠りは合理的、社会的自我の抑制力が弱まっている状態であり、「心の洞窟」の奥深くから、“monsters of diverse kinds” を出現させるかも知れない。そしてその恐ろしい真実は、Goodman Brown の場合のように、dreamer に致命的な衝撃を与えることになるかも知れない。しかしそれは人格の発展にとって欠くことのできない、人生の半面の真実である。或いはまた、眠りは「心の洞窟」の、「光」がみち、「完全」で「平和」な「美しい」世界に咲きみだれる花を、我々の意識上に送り出してくれるかも知れないのである。真昼の覚醒（正気の知）によっては洞察されえない事物の本質を、その美と善を、想像力が働く夜の覚醒がもたらすことを、ホーソンは長篇 *The Scarlet Letter* や短篇 “Rappaccini’s Daughter,” “Drowne’s Wooden Image” を初め、多くの作品に描いている。Giovanni (“Rappaccini’s Daughter”) の夜の覚醒は、真昼の合理的な

意識の光¹⁶⁾でみる Beatrice の醜怪さこそ偽りであることを指し示し、美と善に輝く “real Beatrice” の像を浮かび上らせる。“The Birthmark” では、夢は痛ましい真実（人間の不完全性）を描きだし、主人公 Aylmer の悲劇的な行為の結果を予告する夢である。Brown や Givanni また Robin らの未熟さが、夢の真実を読みとれなくとも、また夢の真実が Aylmer の知的熱狂を阻止しえなくとも、「心の洞窟」の内部をぼんやりと描き出す夢は、人間性の神秘を解く鍵であり、ホーソンは夢の重要性を認め、夢を通して、意識下に広がる広大な「洞窟」に踏み入り、「人間の心の真実」を探ったのである。

“My Kinsman, Major Molineux” は主人公の夜の街の彷徨を描くことによって、彼の内心、時に醒めやらんとし、時に濃密化する、ゆめうつつの状態の中で、徐々に深まっていく夢の世界、を一貫して描いている。たとえ「目が覚めていると彼が思って」いても、それは夢の中で思っているのである。Robin が見る街の風景は文字通り彼の心の風景である。彼のこの心的状態はまた、内的葛藤を示している。ホーソンの愛用する対立概念を用いて言えば、それは “head” と “heart” の相剋であり、言葉を換えれば、自我に作用する意識と無意識との力関係によるのである。この心的状態における体験、そして内的葛藤は、*The Scarlet Letter* の中で、森から書斎に帰えり、夢の真実と対決するまでの Dimmesdale に見事に描写されている¹⁷⁾。時に醒めやらんとし、時に深まる夢の世界から、やがて Robin に「一層深い眠り」の瞬間がやってくる。それは彼が自我意識の支配力の及ぶ領域——「Heart の洞窟」の比喩を借りれば、意識の光がとどく洞窟の中の入口附近——から更にその奥深くに入りこみ、闇に同化される瞬間である。

A deeper sleep wrestled with and nearly overcame him, but fled at the sound of footsteps along the opposite pavement. Robin rubbed his eyes, discerned a man passing at the foot of the balcony, ... (pp. 56-57)

夢の世界の狂気の知は、人間存在の悲劇的な状況を示し、人間と世界についての新しい認識を与え、人格の発展に寄与する可能性をもつ。しかし問題は、夢の体験が自我の体制に組み入れられ、自我の深化・拡大（無意識諸内容の自我意識への統合）が達成されることであって、自我意識が、更には自我そのものが、無意識 (Jung の *Komplex*) に併呑されることではない。ホーソンの悲劇性は、『緋文字』が示すように、「Heart の洞窟」の奥深くにある、光に輝く美の世界 “the eternal beauty” を体験するためには、一旦闇の中に没入しなければならないことであるが、しかし、自我の深化・拡大が達成される時、Brown の悲劇は起りえず、自己発見は究極的に自己実現の達成に連なることが期待できるのである。夢の狂気の知は、また、現実の無視を特徴とするものであり、正気の知を補うものであっても、それに代わることはできない。上掲引用部分の情景は以下のようなものである。Robin は教会に「背を向け」て腰をおろし、彼の前には、背後の天上の真理の殿堂に対する地上の権威の府が、この二つの世界を距てる通りの向うに、威容を見せている。そして一人の「紳士」が「通りを横切って」、教会の「尖塔の影に」いる Robin のもとへやってくる。この情景は、意識の光の領域と「永遠の美」の光に輝く世界の間にあって、永遠性の世界に背を向け、闇 (“terrible gloom”) の中に自らを見失い、悄然とする自我が、意識の領域の境界辺を見回っている良心の声を聞き¹⁸⁾、そしてそれ以後、自我は「人道主義的良心」と緊密な関係を保ち、その声に従って、闇を抜け出し、豊かな現実との同調性を示していくことを暗示しているようである。Robin に親切な助言や適切な指示を与えるこの紳士は、この意味では主人公の「全人間性の反応」である良心の形象化であり、そのことは、突然に現われた、この一面

識もない紳士に対する Robin の “a loud, peevish, and lamentable” な問いかけ¹⁹⁾——そこには親しさと、甘えさえもある。——に、暗示されている。

Giovanni の悲劇が示すように、人格の拡充が夢の真実を欠いては期待できないのと同様に、また豊かな現実の無視によっても達成されがたいことを Goodman Brown の悲劇は表わしている。ホーソンは人間疎外の克服、言い換えれば、人間の理想を “the intellect” と “the heart” の調和にしているが、この「親切的な」紳士—— “a gentleman in his prime, of open, intelligent, cheerful, and altogether prepossessing countenance”——は、自己の思想と感情の内的体験を通して疎外を克服し、愛のあたたかさ、人間とその未来に対する信念の確かさをもつ、豊かな現実の代表者であることを想わせる。そして Robin との関係においては、「若きアダム」に人生に関する深い知恵を伝授する「老いたるアダム」(精神上の父)の役割りを果たす存在である。“well-shaped features and bright, cheerful eyes”(前掲)と記される Robin と、この紳士との相似性は明らかである。Robin を導き、彼に生きる道を示す師父を得て、長い困惑の夜の彷徨は一転して解決へ向う。それは静から動、闇から光の乱舞への急激な転換である。Major Molineux “in tar-and-feathery dignity” の悪夢の光景は Robin に決定的な衝撃を与え、夜の試練の体験を描く作品前半のテーマ、「通過儀礼」は完了する。そして Robin は複雑多様な成人社会の一員となるのである²⁰⁾。

“My Kinsman, Major Molineux” は “Young Goodman Brown” や *The Marble Faun* を初めとする、ホーソンの純心喪失の物語である。Robin は無垢の Eden を去り、人間としての一步を踏み出した若いアダムである。彼が人生の暗い半面に開眼した以上、楽園に退行することは不可能である。そして彼が Brown や Ethan Brand または Giovanni らの、悲劇の人生を辿らないためには、更に数多くの魂の体験を重ね、そして愛と共感、人間とその未来に対する明るい確信に到達しなければならぬ。若い Robin に対する紳士の言葉——“Or, if you prefer to remain with us, perhaps, as you are a shrewd youth, you may rise in the world without the help of your-kinsman, Major Molineux.” (p. 64)——には、彼が辿った人生行路を、今歩み出す若者に対する、年長者のいたわりとおもひやりがある。そしてまた、“feeble intellect” を過信する若者の未熟さをやさしく揶揄しながらも、そこには新しい世代に対する期待がある²¹⁾。Robin が Goodman Brown とは違った人生を辿るであろうことを予感させるのは、彼が作者自身の投影ともみえる師父を得たことによって、彼の “shrewdness” が「こざかしさ」とならず、やがて人生に関する深い知恵に変わり、人生を全幅的に見、豊かな現実生きるであろうという期待があるからである。この期待は悪魔の集会に加わり、人生の暗い真実に開眼し、以後その暗い半面に生きた Brown と違って、Robin が紳士の声に従い、「人道に悖る暴虐行為」(註5参照)——悪鬼の行進——に参加することを自制した事実によって、強化される。教会を後ろに、Robin と紳士が並び、通りに異相の男が Robin を注視しているという情景は、自我に対する良心とイドとの関係を表わす寓意画のようである。自我は作品前半の夜の彷徨でイドの命令に従い、尖塔の影の中に留まるが、イドが再び姿を現わした時には、良心 (Robin の全人間性の反応) とすでに親密な関係を結び、イドの誘惑の凝視に堪えたのである。

“My Kinsman, Major Molineux” は価値あるものを求めて苦難の旅を続け、そしてそれを手に入れるという意味では、探求の神話を表わしている。また、一定の試練の儀式を経て、成人社会に参加を認められるというパターンからすれば、この作品は initiation の神話を描いている。

ホーソンの作品は『緋文字』にみられるように、内容と形式において、すぐれて均衡のとれた構成をもつが、この作品は歴史的背景を記す前書きを除けば、正確に前半と後半との二つの部分に分けることができ、作品前半は主人公の「絶望的な彷徨」を描き、自我がイドの指令に従うところで終わる。そして後半は教会の内部、月光の差す聖書が表わす永遠性の世界を覗き、自我が「全人間性の反応」である良心と親しみ、その声に従うことが中心となっている。イドが写し出す光景は自我に恐ろしい衝撃を与え、結びはあいまいのまま残されるが、自我が良心と緊密な関係を維持していくことはすでに予想されるところである。このように、主人公に対する異相の男と紳士との関係、この作品で紳士が果たす役割と意味の重要性を考えあわせると、この作品が、initiation の神話、換言すれば、主人公の成人社会（罪の共同体）への参加で終るものとは考えられない。それは意味の重層構造をもつこの作品の第一の意味であり、Robin の人生開眼で閉じる life cycle に代って、すでに胎動している新しい life cycle が続くのである。initiation の神話を描くこの作品は、また再生の神話を予想させる。作品の半ばから始まる月光の世界と聖書による啓示は、それまで「弱々しい知性」に頼っていた Robin の heart を始めて「震え」させ、夢の真実を彼の心眼に映し出す。そして彼の「全人間性の反応」が現われることを可能にする。作品後半より始まるこの第二の cycle は、initiation の神話が終った後も続き、作品の世界を拡張、意味の残像を作用せしめる空間を作り出している。俳句などの短詩型に特有の、この叙情空間は通過儀礼という人生の一つの段階の cycle を描いただけで終るこの短篇に、人生そのものの、或は人類の過去から未来へ続く、より大きい未完の歴史の cycle を感じさせる効果をもっている。そしてそれが感動の奥行きを深め、この作品の生命となっているのである。神話の登場人物や舞台背景がアーキタイプなのは当然であるが、この短篇は舞台背景で権力抗争という人類の最も原型的な経験をあつかい、そして古い世代の死と新しい世代の誕生を語ることによって、life cycle という、同様に最もアーキタイプな経験のパターンに収まっていく。Robin の全人間性 (heart) はすでに反応を始め、故郷や眼前の事物に対する見方を変えさせている。たとえ意識されなくとも、再生はすでに始まっているのである。Robin は全人間性の反応を一層高め、夢の真実を正しく読みとり、象徴的な死を経て、より高次の生へ、豊かな現実へ、再生するであろう。作者はこの短篇で、滅びゆく過去と抗争の現実、そして Robin (Everyman) を通して新しい原理に統べられる未来の誕生を語っているのである。

註

- 1) なお、残る2名については、それ以後に任命された royal governors とともに、幸い動乱のない時期に就任し、悲運をまぬがれたと記している。
- 2) Page references preceded by the quotations from “My Kinsman, Major Molineux,” “Young Goodman Brown,” and “Ethan Brand” are to *The Portable Hawthorne*, ed. Malcolm Cowley (New York: The Viking Press, 1955).
- 3) cf. “My love and my Faith, replied young Goodman Brown, …” (p. 74)
- 4) Nathaniel Hawthorne, “The Great Stone Face,” Vol. III of *The complete Works of Nathaniel Hawthorne* (Riverside ed.; Boston, Houghton Mifflin, 1883), p. 437. Hereafter cited as *Works*.
- 5) Major Molineux, “an elderly man, of large and majestic person,” “in tar-and-feathery dignity” と彼をリンチする群衆についてホーソンの描写は、力による権力の奪取に対する作者の否定的な考えを示しているが、それはホーソンの政治的に conservative な態度を示すというよりも、この人間の行為が、Hester を曝し台に立たせる行為と同様に、「人間性に対する犯罪」と考えるからである。—“There can be no

- outrage, methinks, against our common nature — whatever be the delinquencies of the individuals — no outrage more flagrant than to forbid the culprit to hide his face for shame; …” (*The Scarlet Letter, The Portable Hawthorne, op. cit.*, p. 280.) 作者は群衆の非人間的な残忍さを直喩を用いて述べている。—“On they went, like fiends that throng in mockery around some dead potentate, mighty no more, but majestic still in agony.” (p. 63) cf. 併せて作品冒頭の、暗喩による革命の指導者の描写 (p. 46) 参照。
- 6) “But Robin, being of the household of a New England clergyman, was a good youth, as well as a shrewd one; so he resisted temptation, and fled away.” (pp. 51-52)
 - 7) それは “terrible gloom” に閉ざされた「Heart の洞窟」とそのなかにさす光 (*American Notebooks*) を連想させる。
 - 8) p. 54 参照。
 - 9) E. Fromm, 『禅と精神分析』, 佐藤幸治訳 [東京, 創元社, 昭和48年] 193ページ
 - 10) “... he saw (his family) go in at the door; and when Robin would have entered also, the latch tinkled into its place, and he was excluded from his home. ‘Am I here, or there?’ cried Robin, starting; for all at once, when his thoughts had become visible and audible in a dream, the long, wide, solitary street shone out before him.” (p. 56)
 - 11) Major Molineux は Robin の父と従兄弟の関係にある。
 - 12) “He (Robin) was at first considerably surprised by the result of his question, but being a shrewd youth, soon thought himself able to account for the mystery. ‘This is some country representative,’ was his conclusion, ...” (p. 44)
 - 13) Rita K. Gollin は同時代の Melville, Poe と比較して次のように述べている。“Hawthorne’s achievement seems all the more remarkable when we realize that Herman Melville, who also probed men’s hidden natures, rarely used dreams for that purpose.” “Melville did not penetrate the labyrinths of the dreamer’s mind, as Hawthorne did.” また “For Poe, dreams were a device to dramatize the agonies and delights of an acutely sensitive individual in a bizzar situation.” “By contrast, Hawthorne’s solitary dreamer is usually a relatively ordinary man whose dreames are part of an ongoing process of self-discovery.” R.K. Gollin, *Nathaniel Hawthorne and the Truth of Dreams* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1979), p. 16, p. 17.
 - 14) Blithedale の夢の世界の建設について、作者は次のように言う。“If we go no deeper than the intellect, and strive, with merely that feeble instrument, to discern and rectify what is wrong, our whole accomplishment will be a dream...” (*The Blithedale Romance, Works*, II, p. 455.)
 - 15) “... though with tremulous enjoyment, did he feel the occasional relief of looking at the universe through the medium of another kind of intellect than those with which he habitually held converse.” (*The Scarlet Letter, The Portable Hawthorne, op. cit.*, p. 347.)
 - 16) ホーソンはこの短篇で、意識の光を “the daylight of our perfect consciousness” と言うが、「完全な」という彼の言葉には、おだやかなアイロニーがあらわれている。
 - 17) 拙論「Dimmesdale における自己実現の問題再考」, 『英文学研究』(東京, 日本英文学会, 1978年) 第五十五巻, 二号, p. 234, n. 2. を参照されたい。なお, 本論文では Chillingworth を心の洞窟の中から意識の領域に侵入してきた *Komplex* の表象と考えている。
 - 18) ここでいう良心とはフロイトの超自我 (道徳的良心) というより, フロムの用語を借りれば, 「我々の全人間性の反応」としての「人道主義的良心」である。(E. Fromm, *Man for Himself*, ch. 4, B 参照)
 - 19) “Hello, friend! must I wait here all night for my Kinsman, Major Molineux?” (p. 57)
 - 20) Robin の成人社会への参加は町中にひろがる残酷な嘲笑への参加という形で表わされている。
 - 21) それは、一つには文脈の ambiguity が与える効果である。1. “Or, if you prefer to remain with us, perhaps, as you are a shrewd youth, you may rise in the world ...” 2. Or, if you prefer to remain with us, perhaps, as you are a shrewd youth, you may rise in the world ...” 更に “remain with us” も ambiguous で, 示唆的である。この引用文は町の外への逃走の衝動に襲われる Robin に対する, 紳士の返答であり, この “us” の第一の意味は町 (人々すべて) を指す。しかしまた, 力の原理に統べられる現実の残酷さに巻きこまれず, 「人道主義的良心」の声に耳を傾け, 従う人々を意味すると考えることができる。

Synopsis

Viewed from a number of different angles, “My Kinsman, Major Molineux” can be interpreted as, among others, a historical allegory, a political fable, a story of dreams, or of an innocent American abroad, and a myth of initiation, or of regeneration. In this paper “My Kinsman, Major Molineux”, which tells a myth of initiation, is considered to represent a myth of regeneration, or of life cycle, which, it must be added, is not a mechanical repetition of cycles on the same plane but a chain of cycles gradually ascending in a spiral line.

This piece of work can be thematically divided into two: In the first half of the story Robin, our hero, representing ‘Everyman’, “roams desperately,” which ends when Robin (the ego) obeys the order of a fiendish man (the *id*); in the latter half he sits still in front of the church, and follows the dictates of a gentleman (the hero’s ‘humanitarian conscience’). The story begins on a moonlight night, when Robin, “a shrewd youth,” makes his search for the dwelling of his kinsman, Major Molineux, a symbol of worldly success, through ‘the gloom and terror’—to cite from Hawthorne’s *American Notebooks*—of a strange town, demoniac in all its aspects. The town in “My Kinsman, Major Molineux”, with its “crooked and narrow streets”, is as much a symbolic equivalent of his moral labyrinth as the forest in “Young Goodman Brown”, and the young hero moves, as in a dream, “between fancy and reality”.

A dream in Hawthorne is a mode of knowledge, insane and terrifying, but necessary for the fullest development of personality. A dream tells truths, as it does in “The Birthmark”, or in “Rappaccini’s Daughter”, and can be a complement to real life, although it cannot be a substitute for it. This paper holds that everything Robin thinks and does is in a dream, even when he deems himself awake. When Robin (not the author) thinks that he is in reality, he is, figuratively speaking, just a step inside the ‘cavern’ of his heart, that is, in the sub-conscious, where the light of consciousness feebly reaches and dimly illuminates its nooks and corners.

In his dream, just halfway through the tale, Robin catches a glimpse of the world of eternity: A dream figure appears, who is symbolic of the hero’s spiritual father or his ‘humanitarian conscience’, and suggestive of the author’s ideal man of spiritual harmony, who lives among realities of life and, bound to ‘the magnetic chain of human sympathy’, gives life to his spiritual visions. And Robin, under the guidance of this “cheerful” gentleman goes through the final shock of recognition, which ends the cycle of initiation, and a new cycle already on the move takes it over. Though the ending is ambiguous, Robin stays, reborn, Hawthorne seems to suggest, in rich reality.